

属のため信陽出発、二十九日漢口出航、五月七日上海出航、十二日大阪港上陸、同十六日召集解除となりました。

帰宅後農業をしていましたが再召集されず仕舞いです。輻重兵だから召集されなかったのか、私は農耕隊のようなものだから召集されなかったかと思いましたが、終戦後聞いたのですが、何かの間違いか、再召集の予定であったそうです。終戦の陛下の放送は、朝霧高原の戦車学校のあたりで聞いたが、内容は、はっきり分かりませんでした。

部落で「戦争に負けた」と聞きましたが、本気にしなかつた。しかし、確認して馬と馬車を引っ張って家に帰り、そのままにして何をされるか分からぬので一週間何もしないで寝ていました。ところが何もされないで働き出しました。

田圃を一町歩耕していたので、これからは命を取られそうにもないので、冬には専門に耕地整理をしました。そのため八年かかりました。冬は燃料確保と耕地整理、他の者は賭博としゃもの鬮鶏と、人の心が乱れ

ていました。私は耕地整理のおかげで楽になりました。しかし、農業の後継者はいなくなり、三十年ころから電気工事を始め、子供はお陰で今は電気屋をやっています。

軍隊生活も戦後の復興も大変だったが、体さえ達者であれば、いい思い出でもあります。当時の中国の人々にも会いたいと思う。

支那事変初期

酷しい戦闘を生き抜く

兵庫県 上山 芳雄

私は大正三年八月三十一日、旧朝来郡山口村平野、現在の和田山町殿、農家の生まれでした。昭和九年徴集で、十年一月鳥取の歩兵第四十連隊に入営、寒い所で、雪や雨が降ると演習場は泥だらけ。鳥取連隊の兵隊は砂丘で鍛えられていて、行軍や丘陵登り、兵舎から砂丘までは五、六キロ、鳥取駅から三キロ。毎日が

訓練、満州事変が終わった後だったので、満州帰りの二年兵もいました。

私は七歳のとき父を、十一歳で母を亡くしました。親無しで大きくなったのです。当時は福祉施設も福祉の援助もありませんでした。残された子供たちは五人、私は兄弟の三番目、兄、姉、私、弟二人です。親戚でもいろいろ相談はしたのでしようが、結局財産の売り食いで生活することになったのです。兄は高等科二年生、私は父の顔を余り覚えてはいません。

当時は外で裸になっても警察から厳しく注意された時代でしたが、田畑の境界は大体分かるが、山林の境では、お前の親が立ち合って決めたのだと押し切られる。そんなことを言う人から私たちは守らねばなりませんでした。私は寅年だから気性が強く一本気だったと人は言います。自分ではやさしかったと思うのですが、幼い者ながら家を守らなければならぬ、人からの攻撃は防がねばならなかったので、そう思われたのかもしれない。

十七、八歳から大阪城のそばの大阪砲兵工廠に勤め

ました。仕事は工務課、消耗品の配給等と管轄の係で上官には軍人がおりました。

徴兵検査では甲種合格、十年一月入営の時は門松を立てて盛大に祝われ、役場の兵事係に駅まで送っていただきました。「祝入営」の旗立てての入営、新井駅から一人だけでした。私は歩兵だから鳥取で、他の兵科で第十師団の姫路へ行った者も多かったようです。

鳥取では連隊砲隊です。砲は四一山砲、平地では馬に挽かせ、山では分解駄載です。一期の教育は青野原で松林の所です。鳥取駅から汽車で福崎駅下車し、徒歩行軍で二十キロぐらいであったでしょうが、砲も馬も貨車から下ろして青野原へ向かいます。そこには厩舎もあり馬当番もいました。軍装は帯剣、背囊を背負っての行軍でした。班長や上等兵の助教の指示のもと、射手も何も初年兵でやります。

歩兵砲隊は当初、機関銃中隊の中にあつたのですが、昭和十一年分離し、新しい兵舎が鳥取にでき、連隊砲中隊が誕生し、兵舎や砂丘などで教育されるようになったのでした。

昭和十年四月に検閲後外泊を許可され、一泊で帰りましたがその嬉しきは忘れられません。連隊に帰ったらその晩腹が痛くなつた。二年兵は怒るが我慢ができません。衛生兵が冷してくれたが治らない。朝まで我慢したら盲腸炎でありました。手術中人事不省となり、危険な状態となつたので兄や親戚が呼ばれ、病床に来ていました。口もきけません。手術は二時間かかったが麻酔は十分間ぐらいいつか効かないので痛くて暴れる。二十五日ぐらい入院してました。

退院しましたが、力を入れると痛むので、中隊の茶当番を命ぜられ、一等兵にはなつたが一選抜の上等兵にはなれない。青年学校に行つていないので一年半後に上等兵になり、十一年十一月に満期除隊になり、元の砲兵工廠に復帰して勤務してました。

翌十二年、支那事変が勃発、七月の第五動員で召集令状がきました。工廠では万歳で送られ、家に帰り出征兵士として新井駅から鳥取の連隊に入りました。当時の初年兵が二年兵になつていて、そこで観測班になりました。

三、四日で鳥取部隊を出発しました。年齢も二十二歳で独身であり、喜び勇んで列車に乗り込んだものです。神戸から貨物船に乗船、中は蚕棚のようになってます。輸送中私は酔わなかつたのですが、暑い船倉で食事も取れない者も多かったです。

北支の塘沽タングに上陸したら、十年ぶりの豪雨で、泥濘、馬の蹄鉄が取れてしまう。蹄鉄の釘を打つても馬の爪が軟らかくなつており、釘がもたない。蹄鉄が無ければ馬の爪はもたない。そこで、南京袋を足に巻いて爪を傷めぬようにしました。日本の土地ではそのような経験はありませんが、応用動作で難を逃れ、馬を助けることができました。馬は何も言わないが、馬自身は大変でかわいそうでしたが、これもお国の為だと。

塘沽から天津まで進みました。天津の戦闘は終わっていましたが街は焼けていました。天津には入城しないで津浦線で南下しました。十二年九月十日の流河鎮攻略戦ですが我々の初陣です。歩兵部隊が進撃するので、歩兵の直ぐ後から援護射撃をしました。第十師団長は磯貝中将、長野連隊長のもとでの戦闘です。抵抗

はひどく、新しい服で肩章をつけた歩兵が倒れて戦死していたし、壕の中には敵の兵が沢山死んでいました。九月十二日、滄県に入城しました。

九月二十日から二十四日は滄県の攻撃です。周りの戦友が戦死していたので、私もいつ死ぬか分からないと覚悟していました。一発砲を撃つと十発お返しがある。我々砲隊は馬を持っていて馬が砲の音で暴れるので損害がでるのですが、戦闘に差し支えぬようどんどん補充してもらいました。馬がいなければ戦争にならない。馬は分散しておきました。馬は怖いと一カ所にかたまる習性があります。そこへ砲弾が一発くれば一遍に皆やられてしまいます。敵は我が方との距離を把握していました。我々は砲を偽装していても、砲口から出る煙を発見されると、逆に撃たれます。

十月三日の徳県の攻略も滄県と同じようなものでした。毎日が前進、前進で本当の第一線の連続でした。支那の家屋の中のみで泊まるのですが、脚絆を解いて寝たことは何カ月もありませんでした。食料は現地調達をしましたが、私は一切殺生はしませんでした。乾

パンを食べたり、粗末な物だけで、糲をビンに入れ棒で突いて玄米にして炊いて食べたので何とかしのげました。

十月十三日、故城入城、同じような戦闘でしたが、大きな駅のある所で、人口は多いが山が無く水が無い。自分の育った緑の山も、清い川も無い。高粱畑ばかりで、こんなに広い所があるのかと思いました。行けども行けども同じような景色で、麦と兵隊の歌そのままでした。

歩兵砲隊は第一線ではないので、砲の破片でやられる者はあつたのですが、銃弾でやられる者は十人くらいでした。しょう。「痛い痛い」という戦友がいても、砲弾が飛んでくるので收容することもなかなかできません。歩兵は戦車と共に前進していました。ジクザグと戦車の陰を進んでいく。我々砲は敵の重機関銃を探して撃っていました。我々の手に負えぬ物は野砲に撃つてもらうのです。

十一月十二日、清涼店では八路共産軍の急襲に遭遇しての戦闘でした。夜、撤退する時は、進む時よりい

やでした。

十一月十五日、黄河渡河。船をつないで門橋のようにして砲や馬を載せて渡りました。水深は余り深くなかったし水流はゆるやかで、内地の川の流れと違っていました。前もって防御していたので我が軍は被害なく渡れましたが川幅は広く、着岸するまでは気が気でありません。

我々は砲隊ですから直接敵と戦う、突撃することはない。我々は後から歩兵散兵の突撃を見ましたが、若いのかわいそうだなと思いました。倒れていくのが見えるのです。戦友の歌のように抱き上げられず、そのまま前進しなければならぬ。

十二月二十五日、濟南戦。濟南は大きな街ですがその割には歩兵砲の犠牲は少なかつたのですが、歩兵の人は大変だつたでしょう。前進は戦死者や戦傷者を越えていかねばならなかつたのです。

十三年一月五日、津浦線の泰安城は抵抗はありませんが攻略・入城し、二月十一日、濟南を占領しました。三月二十七日、台兒荘の戦闘はひどかつた。あちら

は重砲で撃ってくる。随分死にました。内地からの初年兵も死にました。一般歩兵は随分死んだが、我々歩兵砲としては馬がやられるのがつらい。馬がやられると歩兵が一人で二発の弾丸を背負つてきてくれました。あの時は負けているのかなと思ひました。連隊副官は青い顔をしていましたが、弱気を出すなど言っていました。「〇〇中隊全滅」とか「〇〇中隊長戦死」などの報告を聞きました。戦死者の中には内地からの補充初年兵が随分いました。

戦死者の処置は後方です。前線では燃やす油も無かつたらう。我々は前へ出ることはかりで、後の方はどうなつてゐるのか分からない。ほとんど前進、前進のみで、駐留も休みもなしでした。

夜行軍では飯盒に白いものを目印としてつけていた。小休止でも眠つたら置いてきぼりになってしまう。絶対に眠つては駄目、作戦上退却するのでも、前進より嫌な気持ちでした。歩兵第四十連隊の戦傷死者は、何百人ぐらいたつたか分からないが、自分らは自分の周囲しか分かりませんでした。

四月十三日、棗莊そうそう。五月十四日、禹王山の戦闘では第十一中隊が全滅しました。戦は皆きびしかった。敵も死に物狂いでしたから。

五月十六日、徐州戦。六月七日、亳県入城。

八月十七日、盧州入城。九月七日、光州占領。

九月二十九日、羅山占領。十月十二日、信陽占領。

十一月十七日、長江埠入城。十一月二十九日、揚子江着。

十四年一月、九月、浦口、南京、順徳、曲周、邯鄲邯鄲などの警備。

三月、遺骨還送の命令が出ましたが、私は家族がいないので辞退したのですが、遺骨護衛の二十人くらいと一緒に上海から乗船し、鳥取の連隊に納めました。戦友たちがそれぞれの留守宅に手紙を出しましたら、ある一人息子の家で、その人の着物を着て座つてくれと頼まれました。私が着物を着て座つたら、その親は喜んでくれました。私は両親を子供の時に亡くした一人者です。戦友の代わりに親孝行をしました。それらの訪問した家では大変歓迎してくれました。

十四年十月、部隊は凱旋しましたが、その時はノモンハン戦へ行くとかの噂があつたのですが、停戦の協定も成立し上海から帰国しました。鳥取では礼砲を撃つて盛大な凱旋の歓迎を受けました。

十一月、軍曹に任官除隊（召集解除）となりましたが、近所の者や戦友は再召集で二、三年行つてきたのですが、私にはその後召集はありませんでした。

帰還後は病氣も怪我もなかった。私は戦地で大砲は撃つても殺生は一切しなかつたお陰かも、とひそかに思うことができました。

私の軍隊体験

静岡県 斎藤 清人

私はその日、村の青年団の年中行事である富士山麓における営林署管内の下草刈り作業に汗を流していた。

その時、息をはずませた郵便配達人が「召集令状ですよ」といって一枚の赤紙を私に手渡した。富士山の